

5 歳児における保健指導上の問題点

上 田 礼 子 （東大医学部母子保健学教室）
山 崎 喜比古 （ # ）

1. 研究の目的

5才児の発達水準がどの程度であり、問題児の発見にはどのような発達項目によるスクリーニングが妥当であるが、いわゆる問題行動は子どもの発達過程のどの時期にどの位の頻度であられるか、3才児と比較したとき5才児の健康上の問題やその養育者の直面する問題はどうか、という点を明らかにするための調査を実施した。

2. 調査方法

東京都内足立区K保健相談所管内において、昭和44年11月～45年10月に生まれ、3才児健診を訪れた1641名を対象に、その子どもたちが満5才前後の時点で調査した。方法は郵送によるアンケート法であり、必要に応じて面接を追加実施した。

アンケートに含まれる発達項目は次の11である。

全体運動：でんぐり返し、スキップ

微細運動：ハサミを使う、四角が書ける

生活習慣：大便のしまつ、歯みがき・洗顔

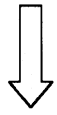
言語・理解：ジャンケンがわかる、左右がわかる、おとぎ話のすじがわかる、歌詞をまちがわずに歌う、自分の名前が書ける。

3. 調査結果

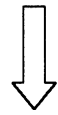
(1) 上記項目は5才児の発達水準を示す指標となり、問題児発見に役立つ。

5才児における通過率はいずれも90%以上であり、うち7項目で、おくれのあった子どもの群の通過率が有意にわかった。

(2) いわゆる問題行動は3才から5才にかけてその出現頻度に消長があった。問題行動のうちにはおくれや歪みのある小児の特徴の一端を示すと考えられるものがあつた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究の目的

5才児の発達水準がどの程度であり、問題児の発見にはどのような発達項目によるスクリーニングが妥当であるが、いわゆる問題行動は子どもの発達過程のどの時期にどの位の頻度であられるか、3才児と比較したとき5才児の健康上の問題やその養育者の直面する問題はどうか、という点を明らかにするための調査を実施した。